四月一二日（水）

学問に励む若人、仕事に精を出す現役の皆さん、子育てに全力を尽くしている若い夫婦を眺めながら、昼日中から飲むビールは非常に旨い。ビアガーデンが本格化するにはまだ少し早い季節だけれども、日差しの強さだけは早々に初夏を思わせる。

頬を撫でる風に春っぽさを感じながら、もう一口ビールを飲んだ。

「いやぁ、郁美さんは残念でしたね」

私の前で小さめのランチビールを楽しんでいる香帆さんに笑いかけた。

「仕方ないですよ。お仕事ですから」

彼女は口に手を添えながら、ランチメニューのお肉を頬張った。しっかり味わって食べる様は、非常に可愛らしく見える。先日の現場で見せた真剣でカッコ良さすら感じさせた人と、同一人物とはにわかには信じ難かった。

今日は不在の郁美さんも、非常にカッコいい仕事ぶりだった。彼女は普段から男勝りな勝気な人だったけど、厨房に並び立っていた香帆さんも、郁美さんの相棒として一切引けを取らない逞しさを見せていた。

「旦那さんは良かったんですか？」

香帆さんは頷いて、「そちらの奥様と一緒です」と切り返した。声をかけるだけかけたけど、相手が誰と何をするかにはさほど興味がない、らしい。志津香は今頃、お友達と共に美味しいランチを食べていることだろう。

そう思ったら、もう二、三杯はビールを飲んだって許されそうな気がする。グラスを空けた香帆さんにも、お代わりを勧めてみる。

「じゃあ、折角なんで」

「さすが香帆さん。そうこなくっちゃ」

ウェイターを呼んで、二人分のお代わりを注文する。ビアカクテルも興味はあるが、エビスの変わり種を頼むぐらいが丁度いい。ウェイターは注文を確認すると、空いたグラスと皿を持って厨房の方へ歩いて行った。

「あら」

香帆さんはお店の外を見て声を上げた。視線の先には、お友達と連れ立って校

舎の方へ歩く哲朗くんがいた。ややあって、彼もこちらの視線に気がついたらしく、顔を上げて軽く会釈した。

「こうやって見ると、彼もまだまだ若く見えますね」

香帆さんは、テーブルに運ばれてきたビールを受け取り、一口飲んだ。

「利発で仕事もできて、立派な青年ですよ。本当に」

あれで性格の一つでも悪ければ難癖も付けられたのに、温厚な好青年というのができ過ぎな気もする。息子の下で仕事をするにはもったいない人材にも思えるが、何故か彼は幸弘をとても慕ってくれている。

ビールを一口飲んで、喉を湿らせる。「コハク」の濃さを味わいながら、言葉を組み立てる。

「香帆さんは、私の息子をご存知でしたよね？ 私の愚息と彼、似てると思いません？」

香帆さんは「う〜ん」と小さく唸りながら、少し上を見て考える。ちょっぴり遠くの哲朗くんを何度か見て、しばらく間を置いたのちに口を開いた。

「ザックリ分類すれば、顔立ちは同系統な気はしますけど、雰囲気というか、空気感は全然違いますよね」

「親子には見えない？」

「そこまでマジマジとは見てませんけど、他人の空似じゃないですか？ 鼻とか目元とか、結構違うような……」

香帆さんに言われた通りに、哲朗くんと幸弘とを比べると、確かに造作の差異はそれなりにあるような気もする。ということは、

「私が考え過ぎ？」

「だと思います。あくまでも、私は、ですけど」

香帆さんは口元に笑みを浮かべながら、グラスを傾けた。第三者から見てもそう思うなら、そうなんだろう。脳裏の悩みを片隅に追いやって、ゆっくりビールを飲んだ。さっきより幾分も豊かな香りと味わいが広がって、私は幸せな気分に包まれた。

初出　令和三年五月四日　Mediumにて公開